私がこの考察を執筆している現在、アメリカは2005年のクリスマスを目前に控えています。全米各地で、弁護士や会計士がクライアントに対し、税制優遇措置が適用される年次贈与を行う時期が来たことを通知しています。こうした通知書を受け取ると、義務感の強い受取人たちは机に向かい、小切手を書き、それを送付します。 そのほとんどには、ごく簡素な送付メッセージしか添えられていない。これらの小切手の受取人は、それを当然の権利の一部として受け取り、それなしではやっていけないとさえ思っている。実際、彼らはそうせざるを得なくなるなどとは微塵も予想していない。*受取人はこうした送金に完全に依存しており、送り手はそのような状態に陥らせることに無自覚に加担している*。明らかに、ここには「贈り物」など存在しない。 寄付者たちは、自分たちが受けた恵みに対して心から感謝する気持ちを持たず、愛を分かち合おうとする人々の生活を豊かにしたいという意欲も欠いている。愛の交換など起こっていない。むしろ、寄付者たちは、税金を減らすという「良き管理者」としての義務感から行動しているに過ぎない。受取人は、単にそのための手段に過ぎない。この失敗した関係という悲劇において、贈り物は単なる資金の移転へと変質してしまう。 「贈り物」と「移転」には違いがある。「贈り物」は、他者の人間的・知的成長を促進するものである。一方、「移転」は、他者を「権利意識」と呼ばれる被害者的な状態へと転落させるきっかけとなりかねない。他者に対して行うあらゆる行為――それが個人としてであれ、慈善家としての社会的資本を通じてであれ――には、これら二つの結果が生じる可能性がある。本章では、「贈り物」と「移転」の違いについて論じる。

「エンタイトルメント（entitlement）」という言葉は、現代社会において、否定的な状態を表す言葉として定着しつつある。もともと、「エンタイトルメント」とは、称号を持つ者、すなわち貴族の一員であることを意味し、その称号によって付与される権利と義務を持つことも意味していた。現代の政治用語において、この言葉は、政府が法律によってそれらを提供する義務を負っているものを市民が受け取る権利を付与する制度を指す。。「entitlement（受給資格）」という状態は、わが国の政府において、こうした給付プログラムによって恩恵を受けることが義務付けられている市民を指す。 現代社会において、こうした制度は、多くの受給者に、「権利を有する」人々が依存や被害者意識のあらゆる兆候を示すような状態を生み出している。これらは通常、極めて富裕で、機能不全に陥った信託財産の受益者に結びつけられるような兆候である。政府から権利を付与された人々は、自分たちが生み出したものではなく、誰か

。彼らは、自らを「権利を有する者」と見なすこの視点を通じて、消極的に生き、自由な人間としての目的や天職を決して見出せない人々である。彼らは、自らの置かれた状況に対して責任を取るのではなく、依存的な立場を他者のせいにする人々である。 最後に、彼らは「権利」を失うことを恐れて生きている人々である。彼らは「当然の権利」として与えられたものに強く執着し、それなしでは存在できないという錯覚の中で生きている。この意味で、彼らは自らの幸福を他者の行為に依存していると見なしているため、被害者であると言える。こうした人々の依存は、彼らを深く不自由な状態に陥れている。不自由であるということは、ある種の奴隷状態にあるということである。 私の見解では、「権利意識」に囚われるということは、あるレベルの深い自己欺瞞の中で、人間として奴隷化されている状態である。「権利意識」を持つ人々の行動について私が興味深いと感じるのは、こうした行動が通常、富裕層によって示されるものであるという点だ。しかし現代社会では、権利付与プログラムによって権利が与えられるたびに、あらゆる階層でこうした行動が見られるようになっている。 多くの現代の民主主義国家が、本来は貴族にのみ与えられるべき地位を、ほぼすべての市民に付与することを選択しているという事実は興味深い。逆説的ではあるが、私たちの社会がより平等主義的になろうとするほど、実際には平等から遠ざかっているのかもしれない。

恩恵プログラムの多くの受益者の生活が示すように、国家であれ個人であれ、他者によるいかなる行為であれ、人を依存状態に陥らせることは、個人や社会の幸福の増大にはつながらないことが今や明らかである。本章を通じて、私は、義務として始まる他者に対するいかなる行為も、依存と人間精神の萎縮につながる可能性が高いと論じるつもりである。ここでいう義務とは、責任や感謝ではなく、義務感のことを指す。 さらに、他者に「権利を主張する」状態を生み出すいかなる行動も、その人にとって、自らの目には、自己認識と個人の自由をますます深く失っていく「犠牲者」となっていくという重大なリスクを伴う、と論じる。

社会は、いかなる寄付者と同様に、贈り物を行う前に、その贈り物が受取人にどのような権利と義務をもたらすかを慎重に検討すべきである。社会は、その贈り物が受取人にどのような利益をもたらすかを自問する前に、まず、その贈り物が受取人にどのような害を及ぼす可能性があるかを自問することから始めるべきである。社会は、この贈り物が、それを受け取る個人の人生を豊かにするのか、それとも損なうのかを問うべきである。

本稿は、権利の帰属に関する個人の問題についての考察であるため、より広範な社会問題についてはこれ以上触れないが、少なくともアメリカ社会における福祉制度が、その受益者をいかに悲しくも依存的な存在にしてしまったかについて、読者の皆様に理解していただきたい。

それでは、個々の人間に影響を及ぼす「権利意識」の問題に移ろう。本章を通じて、私は次のように論じる。

- *各人間の義務と責任とは、この生涯において、自らが達成しうる最高レベルの自己認識、およびそこから派生する能力と個人の自由を獲得することである*
- *自己認識の最良の尺度は、その人間の精神がいかに幻想から解放されているかである*
- *この尺度において「マイナス1」は完全な被害者状態であり、自己が自覚を失い、自己欺瞞に囚われている状態である*
- *ゼロは計算上の点であり、見習い、すなわち被害者ではないが、同様に自らの行動に対して完全な責任を負うには至っておらず、学ぶ準備ができている者を表す；*
- *プラス1は悟りの状態であり、そこでは自己は完全な謙虚さをもって、自分自身や他者に対するすべての行動に全責任を負うことができる。それは、自己を完全に知るという人間の旅路の成就を助けてくれたすべての賢者たちへの感謝から行動し、そうすることで純粋な慈悲そのものとなり、そして同じ自己認識に到達しようとするすべての他者に対して慈悲をもって行動する者である。*

私は、人が「当然の権利がある」と感じるたびに、この尺度においてゼロ以下に落ち込む極めて重大なリスクがあると論じたい。「当然の権利がある」という状態は、他者からの「移譲」を通じて自己が陥る状態であると論じたい。言い換えれば、生まれながらにして
「当然の権利」を持って生まれることはない。その自己が成熟する環境を通じて、また他者からの「贈り物」という形での作用を通じて、その自己は自由となり、自覚を得るのだ。
逆に、他者からの「移転」を通じて、その自己は「当然の権利を持つ」状態となり、自由を失い

かつ自覚を失った状態になる。私は、贈り物や移転を行う者の心の状態や直観的な発達が、受け手への影響において極めて重要であると論じる。 その自己は、自分に対して行動を起こす相手から、自己認識、能力、個人の自由を高めるような恩恵を受けるのか、それとも、より大きな依存、被害者意識、自由の喪失につながる不利益を受けるのか。その自己は最終的に、妄想や自己欺瞞に陥り、他者に「解決してほしい」という恐怖や欲望によって、この「権利を主張する者」を不自由な状態に追い込んでしまうのだろうか？

「義務（obligation）」は、英語で最も深遠な言葉の一つである。ウェブスター辞典によれば、「義務（obligation）」と「責務（duty）」は多少同義であるが、「義務」は行動すべき差し迫った責任、すなわち短期的な責務を意味するのに対し、「責務」は「義務」の別の形態として、長期的な責任を意味する。したがってウェブスターは、「義務」の中には、その行動の根底をなすあらゆる状況において実行される「責務」と「責任」という概念が含まれていると示唆している。 「義務（obligation）」という言葉を考察する中で、私は、それが「贈り物」に適用される場合、ウェブスター辞典が示唆する2つだけでなく、3つの認識レベルがあることに気づきました。

義務としての義務

ユダヤ人の哲学者マイモニデスは、与えることについての考察の中で、与える者の8つの段階を挙げている（本論文の付録に一覧を掲載）。与える者の最も低い段階は、不本意ながら、かつ自分が与えることのできる範囲よりも少ないものを与える者である。 私は、「義務」としての「義務感」を、このレベルの贈り物と同一視している。ここでの贈り手の精神は狭く、自覚に欠けている。その贈り物は、受け手の生活を豊かにしたいという願望からではなく、単なる義務感から行われる。それは、何もしないことで社会的に恥をかきたくないという欲求に動機づけられた、最も限定的な意味での「義務」である。 これは、与える者の精神が関与していない、あるいはさらに悪いことに、行われる贈り物に対して積極的に敵対的な義務感である。マイモニデスの見解にもかかわらず、この種の贈り物は、私の見解では、贈り物とは全く言えない。むしろ、それは、いかなる前向きな精神も伴わない義務に基づく移転に過ぎない。それは何かを豊かにするために設計された移転ではなく、単に支払わなければならない義務であり、他のいかなる債務とも何ら変わらない。

あらゆる精神的伝統は、私たちが貸し手にも借り手にもなってはならないと説いている。貸し手や借り手の精神が、何かを向上させる方向に向くことは稀であり、せいぜい卑しい

。この種の義務に基づく譲渡は、受け手がそれに依存するようになり、その結果として自己と自由を失うことにつながりかねない。これは、与える側が全く見ようともせず、あるいは高められるべき精神としてではなく、哀れむべき犠牲者としてしか見ていない相手に対する義務である。 与える側がこのような義務感に基づいて行動する場合、与える側も受け取る側も、肯定的な自己認識を得ることはできません。この種の義務関係においては、与える側の目には被害者として映った受け取る側が、やがてこうした支援を受ける権利があると思い込むようになるのは容易に想像できます。
受取人は、「私は何らかの不正義の犠牲者であり、それが今の私をこの状態に追いやったのだから、元の状態に戻される権利がある」と考えるかもしれない。

この状況は、米国の福祉制度の失敗に如実に表れている。義務として構築されたこの制度は、本来は人々の自立を目的としていたにもかかわらず、多くの人々を依存状態に陥らせてしまっている。 実際、この制度は、そのプログラムを管理するための巨大な官僚機構を生み出しており、そこで働く職員たちは、支援対象者を「自由を奪われ、依存している」存在として見下すことが少なくない。それこそが、彼らが支援対象者をその状態に追い込んでいるという皮肉な現実である。支援が人間の尊厳を損ない、依存を生み出すことで苦しみを増大させるという、これ以上の例は考えられない。これは、善意から悪影響を及ぼしてしまう典型的な事例である。

1970年代から1980年代のアメリカには、「被害者」であることが流行した時代があった。アメリカの読者の皆さんに問いたい。あの時代、アメリカ社会の精神は高揚していたのか、それとも低迷していたのか。おそらく、大多数の皆さんは後者だと答えるだろう。 自分が「被害者」であると決めつけることは、「当然の権利を主張する」状態へと滑り落ちる危険な道である。ここで急いで付け加えておきたいのは、真に自己認識のある人々は、たとえ最も謙虚な境遇にあっても、自分自身を被害者とは見なさないため、自分や他者に対する不正を是正する勇気と能力を持っているということだ。そのような人々は、自分自身を尊重し、自分の置かれた状況に対して責任を負う。彼らは、誰かに解決を頼む「当然の権利を主張する被害者」として自分自身を見なしたりはしない。

私が提示した計算式が示すように、自分自身に対して完全な責任を負うことこそが、最も自由であるということだ。深く「権利を主張する」ということは、その計算式において不利な立場に立つことを意味する。こうした悲しい状況は、あまりにも頻繁に、義務としてではなく、

義務として行われるが、精神が伴わないものから始まることがあまりにも多い。愛が一切移譲されていないため「贈り物」とは呼べないこのような移譲は、与える側と受け取る側の双方の精神にとって真に危険である。私は、富裕層において、この「義務」としての移譲という形態こそが、あらゆる形態の信託の創設につながり、それが受益者に依存や「送金依存症」を生み出してきたと信じている。それは、国家の福祉プログラムが受給者に依存を生み出してきたのと同じ仕組みである。

今日から、私たち皆が、あらゆる与える行為において、義務感や責務という状態から他者に対して行動することは、受け取る側の精神にとって極めて危険であるだけでなく、私たち自身の精神にとっても危険であることを認識するよう努めましょう。

責任としての義務

この形態の義務において、贈り物をする個人は、「私の贈り物は、利益をもたらす前に害を及ぼすことはないか」と自問する。この義務の場合、他者に対する責任が義務を上回っていることが見て取れる。ここでは、他者への思いやりが寄付者の心と直感に浸透しているのを感じ取ることができる。 ここでの贈り手は「管理者」としての役割を果たしている。マイモニデスの見解によれば、このような贈り手は、与えることの第四／第五段階に位置する。ここでは、贈り手は受け手の幸福を認識し気にかけているが、贈り物の結果についてはある程度距離を置いている。このような

寄付者は「初心の心」を持ち、助けとなり、相手を高めてくれるような贈り物を求めているが、まだ深い自己認識に基づいて与えているわけではない。責任を持って与えるためには、その贈り物が他者に害を及ぼすかどうかについて、寄付者が積極的に配慮することが求められる。 最大の害の一つは、他者を依存的な存在にしてしまうことであり、それに伴い、その人が自らを犠牲者だと感じ、やがて犠牲者であることに「当然の権利」を持つようになってしまうリスクが伴う。ここで、責任としての義務は、寄付者に「この贈り物は善をもたらすか」と問う前に、「この贈り物は害を及ぼすか」と問うよう導く。読者の皆様に断言しておきたいが、この問いを投げかけることは、

寄付を躊躇させるものではないことを読者の皆様に断言しておきたい。むしろ、それは寄付者が「急がば回れ」を実践することを可能にするのだ。 私にとって、この簡潔な格言は、他者に対する責任の最高水準を表しています。私たち自身や他者の存在状態を高めるためには行動が必要ですが、アリストテレスが教えてくれたように、慎重さは人生を生き、その中で行動する上での偉大な美徳の一つです。1 さらに、責任ある寄付に表れる「責任としての義務」には、責任を持って与えるために必要な、慈悲によって和らげられた勇気と正義とバラ

ンスが取れた、慎重さの概念が内在していると私は考えます。

[2] 与えることは勇気の行為である。なぜなら、前述したように、義務としての贈り物――つまり「贈り物」ではなく「譲渡」――は、人間の精神にリスクをもたらす可能性があるからだ。責任を持ってなされた贈り物は、「慈悲としての正義」を反映している。それは、寄付者に人間という方程式の一部を再調整するよう求めるからである。 私は、責任としての義務が、慎重さ、勇気、そして慈悲によって和らげられた正義というこれら三つの美徳に導かれるとき、最もよく実践されると信じている。この形態の寄付の一例が、ソーシャル・ベンチャーである。この形態の慈善活動において、寄付者は、自身の寄付が害を及ぼす可能性のあるリスクを理解している。こうした寄付者たちは、現代の心理学、社会学、人類学、そして現代のビジネス、社会、組織の力学を理解している。彼らは、これらの学問分野から得た知恵に基づいて、他者に対して行動する。 彼らは、人間の行動を変えようとするいかなる取り組みも、事態を悪化させ、人間の苦しみを増大させるリスクを孕んでいることを理解している。したがって、彼らは慎重に、まるで卵の殻の上を歩くかのように始め、即効的な結果よりも、緩やかな個人の変化を追求する。学校のクラス全体を支援し、大学進学まで見守るようなプログラムは、この種の慈善活動の最良の例である。「ヘッド・スタート・プログラム」や「ピース・コー」もその一例と言えるだろう。

この段階の「義務感」においては、贈り物が受取人の心に「当然の権利」という感覚を生み出すリスクが依然として存在する。確かに、そのリスクは、「義務」という心境から行われる贈り物に比べて、大幅に軽減されている。 自らの責任を自覚的に果たし、その責任を全うすることは、自己認識のある人の行動である。これを他者への贈り物にも貫くことは、自己認識の具現化である。他者に与える際、相手の心に「当然の権利」という状態を生み出すリスクを特に意識することは、「他者に対する責任」としての義務の定義を最高レベルにまで高めることである。

「義務」とは、思いやりを通じて、そして思いやりそのものとして他者へ表現される感謝である。「多くを与えられた者には、多くが求められる」という戒めを、私たちの多くは知っている。[3] 同様に、私たちの多くは、この言葉によって啓発されるというよりは、むしろ重荷を感じています。この言葉は「～すべき」という義務感のように感じられるからです。私は、この言葉が定義する義務とは、「義務を果たす」ことではなく、感謝し、思いやりを持つことである、と提案したいと思います。通常、この言葉は、何かを与えられた後、それを分かち合う義務があることを表すものと理解されています

分かち合う義務を負うことだと解釈される。しかし、私はこれが本来の意味ではないと提言したい。「多くを与えられた者には」という言葉は、実は私たちが生まれた時に本来受け取る霊的な賜物を指しているのだと、私は理解するようになった。それらは、私たちの人間的・知的能力を育むことを可能にする賜物である。 豊かな人間的・知的資本こそが、偉大な精神からの真の賜物である。*これこそが、私たちに与えられた「もの」である。*私たちがそれらを多大に授かるという恵みを受けたとき、分かち合うよう勧められているのは、まさにこれらの賜物なのである。これこそが、私たちに「多く期待されている」ことなのである。経済的に裕福な家庭の一員が冗談めかして言ったように、ごく一部の人は「親をうまく選ぶ」ことができ、生まれながらにして、自分の必要をはるかに

はるかに超える富の資本の祝福を生まれながらに授かる。莫大な経済的富と、豊かな人的・知的資本が一人の中に共存するとき、その人はより広い舞台を得て、自らの賜物への感謝を表現しつつ、他者に対して真の思いやりをもって行動することができる。[4] 私たちのうち、莫大な資本を授かる者はごくわずかだが、一人ひとりに人的・知的資本という祝福は与えられている。私が考えるに、あらゆる人間に適用し得るこの「命じられたこと」に関連するのは、まさにこれらの資本の賜物なのである。

感謝としての義務は、他者への思いやりとして表現されるものであり、これはあらゆる偉大な精神的伝統から私たちに受け継がれてきた概念である。思いやりとしての感謝は、知性としての心の問題ではなく、直感としての精神の問題である。感謝することを学び、その美徳を、私たちほど恵まれていない他者への思いやりとして表現することは、最高レベルの自己認識に到達することである。 キリスト、ブッダ、ヒンドゥー教の賢者たち、ユダヤ教の賢者たち、そしてムハンマドは、皆この真理を説きました。興味深いことに、彼らは皆、思いやりとして表現される感謝は、心としての精神、あるいは言い換えれば感情や直感の問題であり、心に基づいた生き方と学びであると主張していました。真に感謝するということは、限りなく喜びに満ちて愛すること、すなわち完全に思いやりを持つことです。これを実践するためには、自分自身を完全に知り、その知識によって自由にならなければなりません。 私は、感謝として、すなわち思いやりとして現れる義務感が、自身の精神を高め、またそれが触れる他者の精神をも高めることにつながると信じています。それは、隣人への愛の実践であり、「フィロソ・アントロポス（人間愛）」の真髄であり、ひいては慈善活動の本質なのです。

数年前、私はロバート・レーマン氏の講演を通じて、このテーマについて教わりました。その講演のテーマは、慈善家としていかにして「偉大な施し手」となるかということでした。レーマン氏は、次のように説明しました。もしその贈り物が

まず自らの内面深くに入り込み、自分が何者であるかを自覚し、その自己認識に基づいて他者に与える者によってなされない限り、いかなる贈り物も意味をなさず、むしろ受け手に害を及ぼす可能性さえあると説明しました。[5] ここに、偉大な「与えること」の本質があります。自分自身を完全に知ることこそが、この人生とその恵みに対する感謝へと導き、その知識をこの生涯において他者に贈ることにつながるのです。 [6] 他者への贈り物として表現されるそのような知識は、自らの欠点に対する思いやりを反映していなければならない。これは、自己認識を通じて他者への真の思いやりへとつながる。私たちは、自己認識によって得られた内省を通じて、恵まれているこの思いやりのある状態に対する感謝を他者に表現することになる
体験する自己認識と、そこから生まれる謙虚さを通じて、他者への真の思いやりへとつながる。自分自身を完全に知るとは、自身の在り方と他者の在り方に目覚めることである。それならば、私たちがこれほど深く思いやりを持ち、人間の境遇の複雑さやその苦しみに対してこれほど深い思いやりを抱くとき、どうして私たちの贈り物が害を及ぼすことができようか？ もちろん、人間である以上、「過ちを犯すのは人間の本性」であるため、依然として過ちを犯すことはあるだろうが、それが害を及ぼす可能性は大幅に低くなるだろう。

愛としての感謝、そこから生まれる謙虚さ、そしてそこから育まれる思いやりは、いかなる人間も、自己の矮小化された状態や「当然の権利」という意識、そしてそこから生じる被害者意識や苦しみの妄想に陥らないことを切に願う深い思いへと導く。したがって、多くを与えられた者は、その者に対して多くが期待されているという事実によって、ある義務を負うことになる。 この意味での「義務」とは、単なる責務や責任ではない。それは、自らの賜物への感謝から、深い自己認識と自由を基盤として、他者への行為において思いやりとして表現される義務である。レーマンが述べたように、自らの内面深くに入り込み、そこで学んだことを他者との関わり、とりわけ他者への贈り物を通じて表現することは、私たちが自分自身について得た知恵を反映している。

マイモニデスも、彼の提唱する「与えることの第七・第八の段階」において、同様の考えを述べている。第七の段階において、彼は与える者に、贈り物が最終的にどこに届くのかを知らず、また受け取る者が与える者を知ることもないまま、匿名で与えるよう勧めている。ここでの与える者は、純粋に自分自身の人間としての境遇に対する感謝から行動し、決して知ることはない他者に対して、喜びと純粋な思いやりをもって接するのだ。 この形態の施しにおける美しい一例は、2001年9月11日の事件や2004年のインド洋津波の直後に、世界中の人々が他者の

2001年9月11日の事件や2004年のインド洋津波の直後、他者の苦しみに対する世界中の人々からの深い思いやりと、その共感から湧き出た支援の波が、まさにその美しい例である。

「与えること」の第8の段階には、人が問題に立ち向かい、自らの必要を十分に満たせるようになるよう手助けするという概念が込められています。この段階の「与えること」は、「人に魚の釣り方を教えれば一生食べさせることができるが、魚を一匹与えても一日しか食べさせられない」という中国の諺に象徴されています。したがって、与える側は、相手の生涯にわたってその人間としての生き方を向上させる手段を模索するのです。 マイモニデスは、「一人の人間の命を救うことは、まるで全世界を救うようなものである」というタルムードのユダヤ教の戒めを実践するための積極的な行動を提唱している。
マイモニデスは、私たちの日常生活において、人が飢えに苦しむまで待って「救う」よりも、その人に「釣る」ことを教える方が望ましいことを気づかせてくれます。これは、
思いやりとして表される行動であり、それはすべての人間が負う「命を救い、それによって苦しみを軽減する」という使命に応えるものである。それは、依存を生み出す単なる施しではなく、人間を自立へと導く贈り物である。私たちのうち、この生涯において、感謝を思いやりとして完全に表現し、その状態そのものになれるほどの自己認識のレベルに到達できる者はごくわずかであり、*私自身も決してその一人ではないことを*、私は十分に理解している。 この在り方は、仏陀、キリスト、ユダヤの賢者たち、ムハンマド、そしてマイモニデス、孔子、老子のようなごく少数の悟りを開いた人々のためのものです。しかし、このレベルの義務を認識せず、それに到達しようともしなければ、私たちが「義務」として果たすべきことの目標を、あまりにも低く設定することになってしまいます。 私たちは、自らの自己成長のために、感謝と、そこから生まれる謙虚さが、他者と関わる中で、一人ひとりが「愛」として思いやりを表現する上でどのような可能性をもたらすかを探求することができ、またそうしなければならない。可能な限り自己認識を深め、自由になることで自らの苦しみを軽減することは、私たち自身の生活を豊かにするだけでなく、思いやりを持って他者の苦しみを和らげる助けにもなるだろう。

受取人に自由をもたらす思いやりの贈り物をもって他者に向き合う人間の素晴らしい例として、モハメド・ユヌスがグラミン銀行を通じてバングラデシュで始めた女性向けマイクロクレジットプログラムが挙げられる。これらは、多くの恵みを受けた人々が、世界中の「最貧層」に属する女性たちとその恵みを分かち合うプログラムである。世界中で、これらのプログラムは、他の人間が

自立できるようになるために何が必要かを真の思いやりと理解をもって共有している。融資は、こうした女性たちが零細企業を立ち上げられるように行われる。「フレンドシップ・ブリッジ」[7]のようなプログラムの中には、女性借り手の子供たちの教育を支援するものさえある。これまでに数百万件ものマイクロローンが実行され、自立度の向上やそれに伴う喜びによって測定されるこれらの女性たちの幸福度が飛躍的に高まっていることを踏まえると、人間の境遇に対する深い自覚から生まれる思いやりが、実際に機能していることが見て取れる。•

そう、私たちは確かに「義務」を負っているが、それは「責務」としての義務ではない。他者に対する「責任」としての義務とは、他者との関わりにおいて害を及ぼさず、できれば何らかの善をもたらすために、私たち全員が達成でき、かつ達成しなければならない状態である。「感謝」としての義務は、「義務」という言葉の最も高次の形態であり、私たちのほとんどが到達することのない自己認識の手段ではあるが、苦しみを和らげるための光の道標として立ち、私たちが目指すべきものである。 他者への思いやりとして表現される「感謝としての義務」は、特に、与える側が、その贈り物を通じて、他の人間を「自分は被害者であり、したがって何かを『当然に受け取る権利がある』」という錯覚に閉じ込めてしまうリスクを回避するのに役立ちます。

ごく一部の者が豊かさに恵まれ、多くの者が恵まれない状況にある今、豊かさに恵まれた私たちには、恵まれない人々がより自由になれるよう支援する義務がある。私たちの贈り物が、勇気と公正さ、そして何よりも思いやりをもって、また「被害者としての権利意識」を生み出す力に対抗する形で与えられるよう意図して行われるとき、私たちはこれを最善の形で実現できると信じている。 私たち一人ひとりに、そう行動する義務があると私は信じています。私たちの行動によって、意図せずして他者が「権利を主張する者」という仮面を被ることを助長してしまうことは、「人命を救え」という私たちへの戒めとは正反対の行為です。あまりにも頻繁に、状況を改善しようとして行う私たちの行動が

他者の自由を拡大するどころか、むしろ制限することで害を及ぼしてしまいます。他者が「当然の権利」を感じさせる状態を作り出したり、

他者が「当然の権利がある」と感じてしまう状態を作り出したり、それを助長したりすることは、人間の苦しみを増大させることに他なりません。「当然の権利」という意識は、人間の精神にとって危険な状態です。それに立ち向かうことは、自由、自己認識、そして人間の繁栄のために働くことに他なりません。これこそが、思いやりとしての感謝の表現の真髄なのです。

本論文を読むすべての読者の皆様が、以下の点を深く考えてくださることを願っています：

- 自分自身がどのような点で「当然の権利がある」と感じているか、また、特に「当然の権利がある」という形で表れる他者の被害者意識を、自分がどの程度増幅させたり、軽減させたりしてきたかについて
- どのような点で、他者の「被害者意識」――特に「当然の権利」という形で表れるもの――を増幅させたり、軽減させたりしてきたか；
- どのような点で、他者の個人的な自由や自己認識を高めることに貢献し、それによって他者が自分自身を「被害者」として捉える度合いを軽減してきたか
- 自分が「義務」をどのように定義しているか、特に他者への「与える」行為において
- 他者への感謝を、思いやりとしてどのように表現しているか

より大きな自由と自己認識から生まれる人間の尊厳の高まりこそが、すべての人間が目指す「計算」の方向性である。「被害者としての権利」を主張することは、その「計算」において負の方向へ進むことである。

私たち一人ひとりが、自らの生活において、また他者との関わりにおいて、この「計算」の肯定的な結末、すなわち自分自身と他者のより大きな自由と自己認識、そしてそれがもたらす個人の幸福と繁栄に向けてのみ行動する義務を負うものでありますように。

© ジェームズ・E・ヒューズ・ジュニア、2005年

---

1 アリストテレス『*ニコマコス倫理学*』、J.A.K.トムソン訳、ヒュー・トレデニック改訂、ロンドン、ペンギン・ブックス、1953年。

2 *同上*

3 ルカによる福音書 12:48。

4 ここで、富裕層と慈善活動に関するポール・シェルヴィッシュの研究に読者の皆様の注意を向けたい。シェルヴィッシュは、自身の著作において、
「ハイパー・エージェント」と定義している。彼は、莫大な経済的富が所有者に一種の強力なエネルギーを生み出し、それが善悪両面へと放射され、所有者が他者に与える影響を著しく増幅させると説明している。その影響力は、そのような資本を持たない者が同様の行為を行った場合に通常生じるものをはるかに超えるものである。私の経験から言えば、シェルヴィッシュの指摘は完全に正しい。私は、そうした個人によって行われた多くの善行と多くの悪行を

を目の当たりにしてきた。そして、こうした個人の影響力は、他者の人生を肯定的にも否定的にも増幅させる金融資本ゆえに、しばしばはるかに大きくなるというシェルヴィッシュの洞察に則り、彼らの行動が実際に極めて大きな効果をもたらすことが多いと理解するに至った。 多額の金融資本を持つ個人や家族を支援する私たち全員が、富裕層を「ハイパー・エージェント」と捉えるというシェルヴィッシュの概念に関する著作を読むべきだと感じます。そうすることで、クライアントの行動が及ぼすであろう増幅された影響をより深く理解し、適切な助言ができるようになるでしょう。 ポール、この極めて重要な洞察と、それを実践に移せるよう定義する方法を示してくださったことに感謝します。シェルヴィッシュの著作のほとんどは、彼のウェブサイト www.bc.edu/SWRI で閲覧できます。

5 ロブ・リーマン氏による*『慈善活動の真髄』は*、1998年2月23日に開催された財団評議会（Council on Foundations）の第12回ファミリー・カンファレンスで発表されたものです。 私は、この章の付録としてレーマン氏の講演全文を添付します。なぜなら、この講演は、家族によるフィランソロピーが、その支援対象者に対していかにして最高レベルの好影響をもたらすことができるかを示す声明であると確信しているからです。読者の皆様には、ぜひこれを読み、ご家族と共有されることを強くお勧めします。

6 「自分が悪であることに気づくこともあるのではないか」と反論する人もいるかもしれません。しかし、私はこれに同意できません。M・スコット・ペックが著書*『嘘つきたち』*の中で、悪について見事な解釈を示し、説明しているように、私は悪とは完全な無自覚であると考えているからです。

7 Friendship Bridge, 3560 Highway 74, Suite B2, Evergreen CO 80439.

- これらのプログラムの成果は、これらの女性たちとその家族が、やがて市民社会に完全に参加し、それによってアマルティア・センが傑作『開発とは自由である』で教えてくれたように、自由になることへの希望をもたらしています！

第II部

家族を支援するための重要な声

社会資本の領域において

ある家族が他者への「贈り物」を考える際、マイモニデスの格子における最高レベルから、最大のインパクトを達成するために、誰の著作が参考になるでしょうか。

私の師であり友人であり、マサチューセッツ州ボストンにある「ザ・フィランソロピック・イニシアティブ（TPI）」の創設者である**ピーター・カロフ**氏は、家族が慈善活動を戦略的に行おうとする際に直面する課題について、数多くの著作を残しています。また、彼はソーシャル・ベンチャリングの本質を解説する上でも重要な役割を果たしてきました。カロフ氏の著作の多くは、www.TPI.org で閲覧できます。

ワシントンD.C.の「全米家族フィランソロピーセンター（National Center for Family Philanthropy）」に所属する**バージニア・エスポジト氏は**、家族フィランソロピーの立ち上げに関する素晴らしい著書『

『Splendid Legacy：ファミリー財団設立ガイド』

ハーバード・カレッジのシニア・フィランソロピー・アドバイザーであり、私の友人兼同僚でもある**チャールズ・コリアー氏は**、多くの家族が自らの価値観を見出し、明確に表現できるよう支援し、それを通じてより良いフィランソロピー活動を行えるよう手助けしてきました。彼の著書『*Wealth in Families*』は、このテーマに関する非常に有益なガイドとなっています。

ディーン・ストーン氏は、ある家族のフィランソロピーとその
形成について素晴らしい物語を、*『ナマステ財団のパンフレット「寄付を通じた家族の結束の構築」』*に綴っています。このパンフレットは、カリフォルニア州サンフランシスコのホイットマン研究所で入手可能です。

クリスティン・W・レッツ、ウィリアム・P・ライアン、アレン・グロスマンは、『*High Performance Non Profit Organizations*』という本を出版しています。これは非営利団体の運営にとって非常に有用なテキストです。

現代を代表する偉大な慈善家の一人である**トレイシー・ゲイリー**と、彼女の同僚**であるメリッサ・コーナーは、***『インスパイアード・フィランソロピー：寄付計画の策定』*という素晴らしいワークブックを著しています。

スーザン・ケニー・スティーブンによる*『非営利組織のライフサイクル：非営利組織の能力向上のための段階別知恵』*という本があります。これは、各家族が自身の

「私たちの活動は順調か？」「組織としてどの発展段階にあるのか？」といった問いに答えるための、素晴らしい評価ツールです。

キャサリン・フルトンとアンドルー・ブラウは、『*未来を見据えて：21世紀のフィランソロピストのための指針*』という本を共著しました。本書は、今日のアメリカにおけるフィランソロピーの現状と、新世紀におけるその課題について深く考察しています。

ポール・シェルヴィッシュと彼の同僚 *であるジョン・J・ヘイヴンズは*、1999年に「*ミリオネアとミレニアム：今後の資産移転に関する新たな推計と慈善活動の黄金時代の展望*」と題する論文を執筆した。」と題した論文をまとめた。この論文の中で、シェルヴィッシュとヘイヴンズは、今後50年間に家族内で移転される数兆ドル規模の資産や、そのうち慈善活動に充てられると見込まれる金額について、興味深い数値を提示している。

付録A

マイモニデスの慈善活動の8つの段階

贈与や貸付、あるいは就職の斡旋を通じて、受給者が自立できるよう支援すること

誰に与えるかを知らずに与えること。また、受贈者も寄付者の身元を知らないこと

自身の身元を明かさずに与えること

誰に与えているかを知らずに与えること（ただし、受取人は施主の身元を知っている場合がある）

求められずに与えること

求められるべきものを、求められてから与えること

本来与えるべき額より少なく与えるが、気前よく与える

不本意に、あるいは後悔しながら与える

付録「B」

ロブ・レーマン著*『慈善活動の真髄』* 1998年2月23日、財団評議会（Council on Foundations）主催の第12回ファミリー財団会議にて発表

I. 心の渇望

今日の午後、皆様とお会いできて誠に光栄です。まず、13世紀のペルシャの詩人ルーミーの詩を、コールマン・バークスによる翻訳で、短い瞑想としてご紹介したいと思います。詩の後に、話を続ける前に、皆さんと共に静かな内省のひとときを過ごせればと思います。

この詩のタイトルは――

「真の仕事」

この世には、決して忘れてはならないことが一つある。他のすべてを忘れても、これさえ忘れていなければ、心配することは何もない。しかし、他のすべてを覚えていても、これを忘れてしまえば、あなたの人生は何も成し遂げなかったことになる。

それはまるで、王があなたに任務を帯びて旅に出させたのに、あなたが百もの他の奉仕をこなしても、王が命じたその一つの任務を果たさないようなものだ。つまり、人間はこの世に特定の仕事を成し遂げるために生まれてくる。その仕事こそが目的であり、それは一人ひとりにとって固有のものなのだ。

「しかし、私は高尚な事業に精力を注いでいる。法学や哲学……そして医学やその他すべてを学んでいる」とおっしゃるかもしれません。しかし、なぜそうしたことをしているのか考えてみてください。それらはすべて、あなた自身の一部に過ぎないのです……あなたの存在の深い根源を思い出してください。

今日の午後、私は私自身の経験から得たいくつかの考えを皆さんと共有したいと思います。

この旅の体験――「私たちの存在の深い根源を思い出す」ための旅です。私は

私はただの一人に過ぎません。専門家でもありません。私が提供できるのは、この25年間にわたる経験や、フィランソロピーをめぐる内なる葛藤から学んでいると私が信じていることだけです。

私が観察していることの核心は、21世紀を迎えるにつれ、フィランソロピーに新たなリーダーシップの役割が生まれつつあることだと信じています。それは、ファミリー財団や家族によるフィランソロピーの活動を通じて生まれつつあるリーダーシップの役割です。フィランソロピーの目的に対するより深い理解が芽生えつつあると、私は確信しています。この目的とは、本質的に、心と精神の内面的な生活と、行動や奉仕という外面的な生活を、意識的な関係の中に結びつけるという、精神的な挑戦なのです。

人類と地球そのものの存続が危機に瀕している今、私たちは意識的に精神を生活のあらゆる側面に統合するよう求められています。これこそが、私たちの文化における内面的な営みであり、フィランソロピーの核心なのです。

ガンディーにとって公的生活は世俗的なものではなく、神聖なものであったと言われています。フィランソロピーが直面する課題、すなわち私が「私たちの共通の取り組み」と呼びたいものは、神聖なものと世俗的なもの、すなわち精神の内なる世界と奉仕の外なる世界を再び結びつけることです。ガンディーのように、私たちは、人間存在の内面的次元（私たちが共有する価値観、意味、目的）が、私たちの公的な行動とどのように関連しているかについて、深い敬意と認識を取り戻さなければなりません。

しかし、宗教と国家の間に憲法上の壁を正当に築いてきた社会において、いかにして精神性と公的生活の関係について語ることができるだろうか。トーマス・ジェファーソンに関するジョセフ・エリスの興味深い新著『アメリカ・スフィンクス――トーマス・ジェファーソンの人物像』の中で、著者は、政教分離の教義の提唱者であるジェファーソンが、『独立宣言』の最初の草案に次のように記していたことを指摘している。

「我々は、以下の真理を『神聖』なものとする。すなわち、すべての人間は平等に創造され、創造主から一定の譲り難い権利を授けられており、その中には生命、自由、そして幸福の追求が含まれる……」

ベンジャミン・フランクリンはジェファーソンを説得し、「神聖な（sacred）」という言葉を「自明の（self-evident）」に変更させた。もし「生命、自由、そして幸福の追求」が、実際に神聖なもの――ひょっとすると人間の秘跡、すなわち「内面的かつ

目に見える内面的かつ霊的な恵みのしるし」と見なされ、もし私たちが、内なる生活と外なる生活、内なる自由と外なる自由、内なる幸福とその他の幸福との関係とは何かを問い始めたとしたら、私たちの文化にとってどのような意味を持つのだろうか？

実際、これらは私たちの財団活動においてますます頻繁に浮上してくる問いである。私たちは、法律や医学、ビジネスや社会活動、小中学校、さらには大学に至るまで、ほぼあらゆる分野で「神聖なもの」への渇望を目の当たりにしている。ある者はそれを「スピリチュアリティ」と呼び、ある者は「内面生活」と呼ぶが、その呼称にかかわらず、この渇望は社会の差し迫ったニーズと密接に関連している。ファミリー財団は、このスピリチュアルな運動の先駆者となってきた。今世紀の終わりに、私たちの文化が「神聖なもの」へと方向転換を遂げつつあるのではないかという、一般的な感覚が広がっている。

ここ5年間だけでも、スピリチュアリティをテーマとした書籍の売上は800パーセント増加した。フェッツァー研究所とノエティック科学研究所が後援した最近の調査によると、4,400万人のアメリカ人が、自身のスピリチュアルな成長を奉仕や社会活動と結びつける、拡大を続ける人々の輪に加わっていることが示されている。

ダン・ヤンケロヴィッチの報告によると、精神的な成長を人生における重要な価値と見なす人々の割合は、ここわずか3年間で53%から78%へと増加した。そして、このグループのうち、自らを「ニューエイジ」と見なしているのはわずか6%に過ぎない。これはまさに主流の運動である。

昨年12月の『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』日曜版特別号で、編集部は「（アメリカにおける）信仰と礼拝の性質に著しい変化が見られる」と指摘し、新しいタイプの信者たちが宗教組織の枠を超えて、スピリチュアリティを日常の生活に溶け込ませていると指摘した。『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』日曜版が表現するように、「神は分散化されつつある」のである。

教会やシナゴーグ、寺院の扉を越えて広がっていると思われる、このスピリチュアリティとは一体どのようなものなのだろうか？

おそらく、それはダライ・ラマ法王が最近次のように述べた際に説明していたものだろう。

「私たち全員が共に、新たなスピリチュアリティを見出さなければならないと深く信じています。私たちには新しい概念、すなわち『一般信徒のスピリチュアリティ』が必要です。この新しい概念は、あらゆる善意ある人々がそれに従うことができるよう、各宗教と並行して構築されるべきです……（彼は強調してこう締めくくりました）私はそれを深く信じており、世界がより良い未来を迎えるためには、それが必要だと考えています。」

この霊的覚醒を表現する言葉は、今まさに生まれつつあるところです。ご存知の通り、霊的な事柄について語ることは難しいものです。ダイアン・ソーヤーは、小学1年生の6歳の女の子のエピソードを語っています。美術の先生が子供たちに「好きなものを描いてごらん」と指示しました。その少女は絵を描くことに深く没頭しており、先生が「もう終わりにしましょう」と言ったことに気づきませんでした。先生は彼女の机まで歩み寄り、優しく「何を描いているの？」と尋ねました。「私は
「神様を描いているの」と彼女は答えました。すると先生は、「でも、神様がどんな姿をしているか、誰も知らないわよ」と言いました。すると少女は笑顔でこう答えました。「私が描き終えたら、みんな分かるようになるわ。」

もちろん、先生の言う通り、私たちは神様がどのような姿をしているのか知りません。（おそらく、私たちには6歳の子供の目と視野が必要なのかもしれません……）現代語には、霊性を適切に表現する言葉がありません。しかし、その言葉の不自由さが、私たちが霊的なものや神聖なものを理解しようとする試みを妨げてはなりません。その重要性はあまりにも大きいのです。私たちは、表面の下にある、私たちの問題の根源に対処できるより深い現実を探求するだけの勇気を持たなければなりません。

199 Main Street, Suite 3 – Northampton, Massachusetts 01060 電話：(413) 582-0071 ファックス：
(413) 582-1330

『慈善活動の真髄』 ロブ・レーマン著 1998年2月23日、
財団評議会（Council on Foundations）主催の第12回ファミ
リー財団会議にて講演

II. 「共通の取り組み」の必要性

財団として、どうすれば世界の状況を改善できるかと自問するとき、私たちの頭には通常、次のような疑問が浮かびます。「どうすれば、より多くの人々や国々を、

善を行う活動に巻き込むにはどうすればよいか？　科学技術を文明の利益のためにどう動員すればよいか？　市場経済はどのようにして世界に繁栄をもたらすのか？

歴史家たちは、20世紀を、私たち人類が組織的な形で世界の諸問題に耳を傾けようとした時代として捉えることになるだろうと、私は確信している。しかし、今世紀末における諸問題は、ますます加速するペースで増大し続けている。数兆ドルが費やされているにもかかわらず（1997年だけで米国の財団だけで推定150億ドルが支出された）、現実には、現代的なアプローチやプログラム、プロジェクトがもたらす影響は限定的である。 ある意味では、とりわけ科学技術の分野において、私たちは想像を絶するほど進歩を遂げてきた。しかし、これらすべての現代的な革新は、重要かつ必要ではあるものの、それだけでは不十分なのである。

おそらく、今世紀を振り返るにつれ、各国に「善を行う」よう説得するだけでは不十分であることに気づくことになるだろう。私たちは、「善」がいかにして行われるかについて、さらに多くを学ばなければならない。善を行うことにおける知恵について、さらに多くを学ばなければならない。

トーマス・マートンは次のように述べている。

もし、自分自身への理解、自らの自由、誠実さ、そして愛する能力を深めることなく、他者のためや世界のために行動し、何かをしようとするならば、私たちは他者に与えるべきものを何も持たないことになるでしょう。私たちが伝えるのは、自らの執着、攻撃性、そして自我中心的な野心という「伝染病」に他なりません。

- 私たちの生活の霊的な側面は、肉体の健康に影響を与えます。
- 数千万もの人々が小グループで集まり、内面生活が行動にどのように影響するかをより深く自覚し、思いやりや人間関係の価値を自らの生活にどのようにより完全に取り入れるかを学び、そして最後に、
- 「女性性の解放」――文化がいかにして、より深く、より関係性重視の視点を通じて現実を理解していたかを示すこと。

私が示唆したいのは、1,000年後の歴史家たちは、この運動への対応や、この変革の時代を育む上で、慈善活動が果たした重要な役割を指摘するかもしれないということです。

変化の時期を育む上で、慈善活動が果たした重要な役割を指摘するかもしれない。彼らは、20世紀の終わりに、慈善活動そのものが、奉仕の生活——すなわち平和、正義、そして環境のための活動——に対して、意識的なリーダーシップを発揮し始めたと述べるかもしれない。

少なくとも、「21世紀の初頭において、歴史家たちが振り返って『これが私たちの貢献だった』と語ってほしいのは何なのか」と、あえて問いかけてみましょう。

そのため、残りの講演では、慈善活動の本質的な目的と、組織や個人として私たちがその目的にどう応えるべきかについて、私の考えを述べたいと思います。

199 Main Street, Suite 3 Northampton, Massachusetts 0 1060

電話：(413) 582-0071　FAX：(413) 582-1330

ロブ・レーマン著*『慈善活動の真髄』*——1998年2月23日

、財団評議会（Council on Foundations）主催の第12回ファ

ミリー財団会議にて発表

III.「与える者と贈り物：愛と金」

現代のフィランソロピーは、一見相容れない二つの概念、すなわち「愛」と「お金」を結びつけています。これらは、私たちの活動において避けられない内的側面と外的側面です。「フィランソロピー」という言葉は、ご存知の通り、「人類への愛」という意味を持っています。しかし、過去10年間にわたるすべての財団の年次報告書を読み通してみても、「愛」という言葉が10回以上言及されている箇所を見つけるのは、おそらく困難でしょう。 実のところ、私たちは「愛」という言葉をめぐる混乱の時代に生きている。私たちは、愛とは他者の幸福を願い、そのために気遣い、行動することだと教えられてきた。しかし、今世紀において私たちが学んでいるのは、自らの内面やそこに絡み合う動機に気づかないままでは、善意に基づいて行動したとしても、それが必ずしも他者の福祉に真に資するとは限らない、ということだ。それでもなお、愛こそがフィランソロピストとしての私たちの使命である。愛が、私たちの活動の中心的な原則となり得ることを、私たちはいつ発見するのだろうか。

愛こそが、内面と外面をつなぐ唯一の真の架け橋であると、私は提案したい。慈善活動の真の通貨は、お金ではなく愛である。しかしもちろん、現代社会において慈善活動の手段はお金である。そこで、より深い疑問が生じる。お金は愛の伝達手段となり得るのだろうか？

私の感覚では、家族による慈善活動に携わる人々は、お金と愛を正しい関係に導くというこの仕事において、他者に伝えるべき特別な知恵を持っていると思います。私たちのほとんどにとって、家族こそが真の精神の学校であり、そこでは内側から外側へとしか教えられない学びの課程に身を置いているのです。ある意味、家族財団に関わる人々は、慈善活動がもたらす道徳的・精神的な課題に備えてきたと言えます。皆さんは、愛とお金というこの試練の場について、他の人々よりも深く理解しているのです。

私の経験を少しお話しさせてください。私が初めて財団で働き始めた頃、無邪気な利他主義的な傲慢さに、いかに簡単に陥ってしまったかを覚えています。利用可能な財源と、私たちの大きな使命感に支えられ、絶えず称賛され、特別な存在として扱われる中で、私たちが資金提供しているプログラムが世の中の諸問題を解決できると、心から信じ始めていました。 しかし徐々に、善意ある「助成先」が、私たちが解決したいと願う問題そのものへと自らを形作っていくにつれ、率直でオープンなコミュニケーションが崩壊し、真の相互関係が失われていくことに気づき始めました。
関係性の基準が主に「私たちと彼ら」、「持つ者と持たざる者」という二分法に変わると、恐怖と不信感が芽生えつつあるのを感じました。助成先と私が互いを目的達成のための手段として、戦略の駒として扱い始めたとき、私はまさに恐れていた「金銭の政治」に引き込まれていくのを感じました。

金という影の下で絶えず働きながら、いかにして私たちの職業への献身を保ち、人間関係を真摯なものに維持すればよいのか。これこそが、私たちにとって最も深い課題の一つである。

近年、私は、金銭が人間の美徳に対する障壁ではなく、精神のための道具となり得る方法を、常に実践できているとは限らないにせよ、理解し始めています。それは、私たちの
人間関係を中核に据えることです。説明させてください。私が理解し始めたのは、単にこれだけです。すなわち、お金が及ぼす影響は、

与える側と受け取る側の関係性の性質に左右され、私たちが金銭をやり取りするたびに、それは私たちの関係性の質が表れているのだということです。

私自身の歩みの中で、私は「与える側」から「受け取る側」へと、この道を何度も歩んできました――それは常に、ヘレン・ルークが「謙虚さの架け橋」と呼ぶものを通ってのことでした。無力感に襲われ、いわゆる「外部の問題」を
「自分自身の内側にも存在していた困難」として捉え始める時、私はこの橋の上に立っていることに気づくのです。チベットの格言にあるように、「心のひび割れから、神秘が差し込む」のです。 そして、まさにこの場所――私の思考のひび、私のプライドのひび、私の心のひび――において、私は周囲の人々の生活の中に育つ人間性の種を発見し始めるのです。そして、これを受け入れることができたとき、どういうわけか状況は一転し、他者の中に見出された人生の全体性が、私の中で展開し始めるのです。

ガンジーはかつて、自分自身を理解するまではインドの問題を理解できなかったと語った。この言葉は、まず最初にすべきことは、私たちに最も近い世界――すなわち、私たち自身の心の中にある世界――を探求することだと、私たちに思い出させてくれる。

この内なる理解がなければ、たとえ私たちのプログラムがどれほど革新的であれ、善意からどれほど多額の資金が投じられようとも、その資金がやり取りされる関係性が「完全性」と「自由」を伴っていなければ、トーマス・マートンが言うように、私たちが交換しているのは、自分自身のエゴ中心の野心、恐怖、そして幻想に過ぎないのだと、私は確信している。

もし私たちが、この「関係性」を中心としたお金の定義を受け入れ、私たちが解決しようとしている問題が自分自身の中にも存在することを認めるならば、たとえ最高の善を意図して行われたとしても、お金を交換する際に「私たちという存在そのもの」の交換が、取引の「細則」として存在していることに気づくでしょう。

私たちは、金銭の交換と密接に結びついた世界に生きていることを認めなければならない。そうであるならば、私たちはそれぞれの交換を通じて何を表現しているのかに留意する必要がある。金銭をめぐる関係における真摯さが、与える側が受け取る側に対して権力を維持することよりも重要であるという理解を、常に心に留めておかなければならない。

重要な問いは、どうすれば私たち自身や制度を人間関係の中心から外し、その代わりに私たちの共通の使命を見出せるか、ということだと私は考えています。

199 Main Street, Suite 3 – マサチューセッツ州ノーサンプトン 01060

電話：(413) 582-0071 – FAX：(413) 582-1330

『慈善活動の真髄』 ロブ・レーマン著 1998年2月23日、
財団評議会（Council on Foundations）主催の第12回ファミ
リー財団会議にて発表

IV. 組織と個人の内面

昨年、フェッツァー研究所では、私たちの中心的な使命を再評価する中で、このことについて多くのことを学びました。ほとんどの組織と同様に、私たちが最初に自問したのは、「何が私たちをユニークにしているのか、私たち独自の目的とは何か」ということでした。フェッツァー研究所の独自性を捉えようと、スタッフや理事たちとの数多くの対話を基に、5、6本の文章を書いたはずです。しかし、それらの草稿のどれもが、心に響くものではありませんでした。

皮肉なことに、もう手詰まりだと感じたその時、私たちは新たな出発点に立っていたことに気づいた。ヘンリー・キッシンジャーが言ったように、「私たちは往々にして、他のすべての可能性を尽くして初めて、正しい選択にたどり着くものだ」。私たちが疲れ果てた今、
突然、他者の中に自分たちをより完全に見出すだけの光が差し込んだ。組織の生活にも、私たち一人ひとりの人生にも、ある瞬間が訪れる。それは、自分たちの「独自性や特異性」という問いから、他者と共有する「より大きな目的」という問いへと、主たる意識を向け始める瞬間である。そして、自分たちがより大きな何かの一部であると理解し始めるにつれ、私たちの真のアイデンティティが鮮明に浮かび上がってくる。

しかし、組織も個人と同様、エゴの肥大化に極めて陥りやすい。このことに気づくには、自らの組織の目標や目的に合わせて現実を無理やりねじ曲げようとする、私たちの終わりのないパターンを認めるだけでよい。すべてが組織の目的や使命のみに回っているとき、お金は

は、現実を自分たちのイメージに合わせて再形成する、組織的な「重力」となる。これらすべてを踏まえ、私は組織生活においてコペルニクス的転換が必要だと提言したい。なぜなら、地球が宇宙の中心ではないと認識されてからすでに500年近くが経過しているにもかかわらず、組織は依然として、自らが活動する世界の中心に自分たちを位置づけているからだ。

私が指摘したいのは、私たちの組織が中心に留まっている限り、金銭をめぐる関係は自我への執着という重荷に圧迫され、真の協働の可能性を阻害し続けるだろうということです。そして、世界は複雑すぎ、資源は乏しすぎるため、単独で切り抜けることは不可能です。

私たちは、より良い協力の方法を見つけなければなりません。真の協力とは、共通の目標のために資金や知的資源を結集すること以上のものです。結局のところ、知恵や資金という資源には頼りつつも、恵みという資源には頼らない協力は、単なる「家具の配置換え」に過ぎないのです。

真の協働には、組織生活の核心を捉える視点において、根本的な変革が求められます。ここで重要なのは、「パワー（power）」という言葉に対するより深い理解です。『アメリカン・ヘリテージ辞典』によると、もともと「パワー」という言葉は「〜であり得る」という意味でした。しかし時が経つにつれて、「〜を行うことができる」という意味へと変化していきました。これは、内面的な生活、すなわち「ある」という能力に焦点を当てていた意味が、外面的な生活、すなわち「行う」という能力に焦点を当てるものへと移行したことを反映しています。 「パワー」の意味におけるこの変化は、私たち全員が苦しんできた不均衡を反映しており、その不均衡こそが、私たちの抱える多くの問題の根源となっている。私たちが理解し始めているのは、精神と奉仕が一体となったこの生活には、「あること」の力と「行うこと」の力との関係を取り戻すことが必要だということである。古代キリスト教の格言が告げているように、「行動は存在に続く」のである。

究極的に、精神と奉仕の生活を統合するには、新たな論理、すなわち「精神の論理」が必要であり、それは私たちに内面と外面の生活を結びつけ、制度的な生活の基礎原則に内面的な次元をもたらすことを求めている。 例えば、伝統的な組織の論理では、まず目的を定義し、その目的を達成するための組織構造を構築するとされています。しかし、「霊の論理」によれば、最初の問いは「私たちの目的は何なのか」ではなく、「私たちはどのように共に生きるべきか」であるべきです。これには、私たちの

組織のビジョンには、目に見えるものだけでなく、より本質的には「見る能力」が含まれていること、組織の戦略には、私たちが行うことだけでなく、より実質的には「私たちが何者であるか」が含まれていること、そして組織の評価には、私たちが達成したことだけでなく、より根本的には、マザー・テレサが指摘したように、私たちの「忠実さ」が含まれていることを理解しなければならない。

この視点のわずかな転換を通じてこそ、私たちは共通の使命を見出すことができるでしょう。しかし、この私たちが共有する使命とは一体何なのでしょうか？この会議には、教育、社会不正、保健、環境、宗教、芸術など、多様な目的を持つ多くの財団が集まっています。表向きの活動においては、私たちは確かに劇的に多様ですが、私が提案したいのは、私たちの活動を内側から外側へと見つめ直すことで、初めて共通点を見出せるということです。 私たちが、個人的な領域における自身の精神的な課題に向き合わずに、公的な領域の大きな課題に取り組むことはできないと認識するにつれて、私たちの共通の使命が見えてくるでしょう。その使命を果たすためには、私たち自身がその使命そのものでなければなりません。すなわち、私たちの人生の最も深く、最も神聖な部分を掘り下げるという、極めて個人的な取り組みこそが、その使命なのです。

私たちは、一人ひとりが内なる旅路を歩んでいることを互いに信頼し、その道のりで支え合うというレベルにおいて、共に共通の営みを行うのです。そして、私たちの個人的な井戸の深淵を探求することを通じてこそ、すべての井戸に水を供給する共通の泉を発見するのです。

この深い内なるつながりを自覚することによって初めて、私たちは真の愛をもって行動する自由を得ることができます。そうでなければ、私たちは単に反応するばかりで、絶え間ない「行動」の奔流に惑わされてしまうのです——トーマス・マートンが「現代の暴力の遍在する形態」と呼んだものです。彼の洞察に耳を傾けてください。

現代生活の慌ただしさとプレッシャーは、その本質的な暴力の一形態であり、おそらく最も一般的な形態である。無数の相反する懸念に流され、あまりにも多くの要求に屈し、あまりにも多くのプロジェクトに身を投じ、あらゆる事柄においてすべての人を助けようとすることは、暴力に屈することである。活動家の狂乱は、その平和のための活動を無力化してしまう。

では、当然ながら、問題は「どうすればよいか」ということになる。絶え間ない「行動」という暴力に、どうすれば抵抗すればよいのか。ベネディクト会の言葉で言えば、「どうすれば私たちの仕事は祈りとなるのか」ということだ。

私たちを日常の生活や現実の世界から切り離すのではなく、そこにしっかりと根付かせるのは、私たちの霊的実践なのです。祈り、瞑想、マインドフルネス、沈黙といった実践は、人生をありのままに見つめ、一方ではロマンチシズムを、他方ではシニシズムを避ける助けとなります。目覚め、食事、仕事から、ガーデニングや散歩に至るまで、日常生活に組み込まれることで、霊的実践は私たちが知恵をもって物事を見極め、思いやりをもって行動する助けとなるのです。

199 Main Street, Suite 3 Northampton, Massachusetts 01060

電話：(413) 582-0071 ファックス：(413) 582-1330

『慈善活動の真髄』 ロブ・レーマン著 1998年2月23日、
財団評議会（Council on Foundations）主催の第12回ファミ
リー財団会議にて発表

V.「慈善活動の真髄」

最後に、マリアン・ライト・エデルマン氏の最近の演説に言及して締めくくりたいと思います。彼女はその中で、共和党の元党首リー・アトウォーターが、7年前、40歳でがんで亡くなる直前に書いた文章を振り返っていました。リー・アトウォーターの言葉こそが、私が今日伝えようとしてきた真実を表現していると思います。

「私ががんに襲われるずっと前から、私は何かがアメリカ社会をじっと見つめているのを感じていました。それは、この国の国民――共和党員も民主党員も問わず――の間に広がっていた感覚でした。彼らの生活から、何かが欠けている、極めて重要な何かが欠けているという感覚です。私は、
共和党を、その機会を活かせるように位置づけようとしていたが、それが具体的に何なのかははっきりとは分からなかった。病に倒れたことで、社会に欠けているものは、私自身にも欠けていたものだと気づかされた。ほんの少しの心、そしてたくさんの兄弟愛だ。80年代は「獲得」の時代だった。富、権力、名声を獲得する時代だった。私は他の人より多くを手に入れたことは分かっているが、いくら手に入れても、心は空虚なままだ。家族と過ごす時間を少しでも長くするために、どんな権力とでも引き換えにしないだろうか？ 友人たちと過ごす一晩のために、どんな代償を払わないというのか？　その真実を直視できたのは、死を招くような病に罹ったおかげだった。しかし、冷酷な野心と道徳的腐敗に囚われたこの国は、私の死を通じて、この真実を学ぶ

ことができるはずだ。（彼は招待の言葉で締めくくる）。私は

80年代や90年代を誰が導いていくのかは分からないが、その人物には、アメリカ社会の核心にあるこの精神的な空白――この『魂の腫瘍』――に語りかけるよう求めなければならない。」

誰が私たちを導くのか？　「私たちの心の奥底にある精神的な空白に語りかける」というこの呼びかけに、誰が応えるのか？

心の内にある」という呼びかけに応じるのだろうか？」私は、21世紀の指導者が誰であるか、私たちはすでに知っていると信じている。この部屋に座っている私たち一人ひとり、そして後に続くすべての人々が、このリーダーシップという挑戦を受け入れなければならない。それは、内なる精神の生活と、外なる奉仕の生活を結びつける、内面から生まれるリーダーシップである。

そうすることで、私たちは偉大な精神的伝統が教えてきたことに気づくでしょう。それは、端的に言えば、内なる「完全性」と「自由」への能力を高めるにつれて、外なる「愛」と「奉仕」への能力も強まる、ということです。これこそが私たちの共通の使命であり、慈善活動の核心への呼びかけなのです。

199 Main Street, Suite 3 Northampton, Massachusetts 01060

電話：(413) 582-0071　FAX：(413) 582-1330